

# 戦前期上海裕孚系の企業グループと 長崎泰益号・台湾関係商社との漢方薬貿易(六)

和田 正広・翁 其銀

## 目 次

### はじめに

#### 一 裕孚洋行と長崎泰益号・台湾関係商社との漢方薬貿易

1 旧上海における洋行の勃興と裕孚洋行の沿革 (以上・第11巻第1号)

2 裕孚洋行の経営方針の転換と長崎泰益号との関連

(以上・第11巻第2号)

3 裕孚洋行の輸出漢方薬の統計と分析 (以上・第11巻第3号)

#### 二 裕孚洋行と長崎泰益号・台湾関係商社との漢方薬貿易

1 裕孚系における裕孚薬行の地位

2 裕孚薬行の漢方薬三角形販路への参入

3 裕孚薬行の輸出漢方薬の統計と分析 (以上・第12巻第1号)

#### 三 寿康薬行と長崎泰益号・台湾関係商社との漢方薬貿易

1 寿康薬行の歴史と特徴

2 寿康薬行と長崎泰益号との紆余曲折の関係 (以上・第12巻第2号)

3 寿康薬行の輸出漢方薬の統計と分析 ( 本号)

#### 四 寿康福記薬行などの長崎泰益号・台湾関係商社との漢方薬貿易

1 寿康福記薬行などの漢方薬三角形販路への参入

2 寿康福記薬行などの輸出漢方薬の統計と分析

### おわりに

### 三 寿康薬行と長崎泰益号・台湾関係商社との漢方薬貿易

#### 3 寿康薬行の輸出漢方薬の統計と分析

##### (1) 寿康薬行の輸出漢方薬の概況

前述の通り、上海寿康薬行は裕孚系の企業グループの一メンバーとして、その本店・裕孚洋行よりも早く漢方薬三角形販路に参入していたが、筆者の入手した長崎泰益号宛て該薬行の現存書簡は60余通しかなかった。しかも、その中には1919年から1926年までの書簡は一通もない。これは寿康薬行から輸出された漢方薬の品目・数量の統計、該薬行と長崎泰益号・台湾関係商社との取引状況の解明に大きな困難を惹起した。さいわい、1927年から1930年までの四年間は、毎年みな一部分の書簡は残存しており、その中の関係データは相当に充実している。こういうことから、この四年間の商務書簡を解読しながらそのデータを統計・分析し、上海寿康薬行と長崎泰益号・台湾関係商社との漢方薬貿易の概況と特色を窺いたい。

表1 泰益号の仲介による寿康薬行と台湾入荷商社との取引概況についての統計<sup>(1)</sup>

出荷期日	薬種の名	単位	総重量	純重量	入荷の商社	地域
1927. 4. 8	蓮子	1件			捷茂薬行	台北
1927. 4. 22	吋芎	2件			台湾薬材公司	〃
	紫金錠	不明				
1927. 7. 5	当归	5件			万成昌薬行	〃
〃	〃	6連			参奇薬行	〃
	晉耆	3件				
〃	姜活	1連			徳興商行	台南
	当归	1件				
〃	晉耆	1件			謝協源薬行	員林
	当归	8連				
1927. 10. 22	冬花	1件	130斤	89.25斤	林協興商行	台北
	蓮子	1包	150斤	125.8斤		
1927. 10. 30	水蓮	1盒	(郵送の盒)	6斤	万成昌薬行	〃

1927.11.1	黄 連	1 包			万成昌薬行	台北
1927.11.2	〃	5 件			乾 元 薬 行	〃
1927.11.5	晉 耆	1 件	314斤	232.9斤	〃	〃
	肚 黄	1 件		204斤		
	冬 花	1 件	93斤	60.35金		
	全 虫	1 件	61斤	44.2斤		
	二 万 断	1 件	300斤	238斤		
1927.11.7	薬 材	4 件			謝協源薬行	員林
〃	〃	1 件			捷 茂 薬 行	台北
〃	〃	2 件			林協興商行	〃
1927.11.15	杭 菊	1 件	(195包)	80斤	万成昌薬行	〃
1927.11.27	高 麗 参	1 包	(郵送の包)	10斤	謝協源薬行	員林
1928.1.29	杭 菊	4 件			台湾薬材公司	台北
	毛 菇	1 件				
	菊 花	3 件				
1928.2.19	白 朮	1 包	(郵送の包)	12斤	東 昌 薬 行	台南
1928.2.20	羌 活	1 件	310斤	230斤	〃	〃
	柿 霜 餅	1 件	128斤	90斤		
	大 芸	1 件	153斤	124斤		
〃	蘆 貝	1 件		105斤	捷 茂 薬 行	台北
	冬 虫 草	1 件に	(10封)	8 斤		
	紅 蓮 子	まとめ	143斤	120斤		
	黄 連	る。	(2 包)	9 斤		
〃	蓮 鬚	1 件	130斤	90斤	台湾薬材公司	〃
	馬 勃	1 件	137斤	65斤		
	大 芸	1 件	322斤	220斤		
	杏 仁	1 件	203斤	167斤		
	川 貝	1 件	240斤	154斤		
	川 貝	1 件	336斤	223斤		
〃	羌 活	2 件	556斤	410斤	林協興商行	〃
1928.2.23	晉 耆	1 件	352斤	269.4斤	謝協源薬行	員林
	三 稜	1 件	277斤	226.9斤		
〃	杏 仁	1 件	224.4斤		林協興商行	台北
1928.2.26	紅 参 鬚	1 件		100斤	謝協源薬行	員林
〃	杏 仁	1 件	270斤	224.4斤	捷 茂 薬 行	台北
1928.3.26	杭 菊	200包	(郵送の包)	90斤	茂 順 薬 行	鹿港

1928. 4. 15	甘 松	1 件	348斤	278.8斤	謝協源薬行	員林
	蓮 子	1 包	149斤	124.1斤		
	杭 菊	200包	(郵送の包)	85斤		
	羌 活	5 件	1400斤	1020斤		
	黄 菊	合わせ	62斤	52.6斤		
	毛 菇	て 1 件	45斤	38.25斤		
1928. 4. 15	参 鬚	1 盒		57.6斤	栄徳薬行	彰化
1928. 4. 20	羌 活	1 件	315斤	233.7斤	捷茂薬行	台北
〃	黄 菊	1 件	190斤	130.5斤	乾元薬行	
〃	紅 参	7 包		30斤	謝協源薬行	員林
1928. 4. 22	川 貝	1 箱	120斤	83.3斤	栄徳薬行	彰化
1928. 5. 8	木 耳	1 包			万成昌薬行	台北
1928. 6. 2	黄菊双芽	2 件			謝協源薬行	員林
	参	郵送盒		40斤		
1928. 6. 5	紅 参	6 包		30斤	〃	〃
1928. 6. 7	紅 参	2 包		10斤	〃	〃
1928. 6. 22	白 蓮	1 連			林協興商行	台北
1928. 6. 24	羌 活	2 件			〃	〃
〃	白蓮子	3 包			〃	〃
	扣 貝	1 件				
	紅 棗	8 包				
1928. 7. ?	羌 活	1 件			茂順薬行	鹿港
1928. 7. 30	晉 耆	1 箱	335斤	2 箱は合わせて483斤	捷茂薬行	台北
		1 箱	334斤			
〃	石 柱	4 盒		22.7斤	謝協源薬行	員林
		5 盒		25斤		
1928. 9. 1	羌 活	1 件	309斤	232斤	万成昌薬行	台北
1928. 11. 14	白蓮子	1 包			捷茂薬行	〃
〃	池 黄	1 件			乾元薬行	〃
1929. 4. 3	石 柱	8 盒			謝協源薬行	員林
〃	木 耳	1 包			捷茂薬行	台北
1929. 5. 15	杭 菊	1 件			茂順薬行	鹿港
1929. 6. 26	晉 耆	1 件			台湾薬材公司	台北
	川 帰	2 連				
	西 帰	5 連				
1929. 7. 23	紅 参	23盒			謝協源薬行	員林

1929. 7. 23	晉 耆	合計 5 件			謝協源薬行	員林
	独 活					
	羌 王					
	菊 花					
1929. 7. 25	紅 参	1 盒		75斤	〃	〃
	参 鬚	1 盒		10斤		
1929. 8. 1	棗 杞	2 件			参 奇 薬 行	台北
1929. 10. 1	天字別直参	1 盒	(郵送の盒)	1 斤 (その代価は116銀両)	泰 益 号	長崎
1929. 10. 13	杏 仁	1 包	207斤	2 包の純重量は355.3斤	捷 茂 薬 行	台北
		1 包	215斤			
1929. 11. 19	木 耳	合わせて1盒 (郵送)		重量各0.4両 (代金合計23.15銀両)	〃	〃
	燕 窩					
〃	棗 杞	1 箱	157斤	108斤	乾 元 薬 行	〃
1929. 11. 23	川 帰	1 連			建 昌 薬 行	台南
	羌 活	1 連				
	西 帰	1 連				
1929. 12. 1	棗 杞	1 件			〃	〃
〃	〃	1 件			参 奇 薬 行	台北
〃	〃	1 件			捷 茂 薬 行	〃
1930. 3. 2 (太陽暦)	滁 菊	1 件		(値段35銀両)	謝協源薬行	員林
	紅 参 鬚	1 件		(値段40銀両)		
1930. 3. 9 (太陽暦)	菊 花	1 件		90斤	〃	〃
1930. 4. 3 (太陽暦)	棗 杞	1 件		125斤	参 奇 薬 行	台北
	白 蓮	1 件		245斤		
1930. 5. 8 (太陽暦)	蓮 子	1 件		300斤	捷 茂 薬 行	〃
1930. 5. 9 (太陽暦)	白 蓮	1 件	(1 件は裕孚 洋行所有)		〃	〃
	〃	1 件			〃	〃
1930. 5. 16	杭 菊	210包	(郵送の包)	89.25斤	茂 順 商 行	鹿港
〃	九節菖蒲	1 件	57斤	43斤	万成昌薬行	台北
	韭 白 淨	1 件		36斤		
	皮 硝	1 件	100斤	85斤		

1930. 5. 20 (太陽暦)	羌 活	1 件		240斤	中 興 薬 行	台中
	当 帰	1 件		170斤		
	参	1 件		129斤		
1930. 6. 28 (太陽暦)	人 参	2 支 (郵送)		1 斤 (1支は0.5斤)	捷 茂 薬 行	台北

表 1 は長崎泰益号宛て上海寿康薬行の1927年旧暦 4 月 8 日から1930年新暦 6 月28日までの現存する商務書簡中の関係データに基づいて作成したものである。

以下、統計表 1 中の幾つかの問題点を説明したい。

#### A 旧暦と新暦の問題について

旧暦は太陰暦ともいい、新暦は太陽暦ともいう。長崎泰益号宛て上海の漢方薬出荷商社の商務書簡の日付には旧暦と新暦との混用が稀ではない。翁其銀『上海中薬材東洋荘研究』は次のように述べる。「中国では、1911年10月の辛亥革命以降、公式に新暦の実施が公布されたが、実際には庶民大衆は旧暦しか知らなかった。1949年10月、中国共産党が中国大陆の支配権を掌握して以来、新暦は初めて広く実施されるようになったが、田舎では旧暦がまだ残っていた。これは長崎泰益号商務書簡の新旧暦混用の歴史的原因である。当時の具体的状況の下で、このような混用は発信と受信との双方にとっては支障があまり多くなかった。しかし、50～60年を経た今日、本書簡を読む者には、このような混用はもはや混乱に変容しており、膨大な長崎泰益号商務書簡の整理・解読の一大難題となってきた。」<sup>(2)</sup>

長崎泰益号宛て上海寿康薬行の商務書簡も当然例外ではない。しかし、その混用には幾つの特徴がある。例えば、1927年頃は、主に民国暦と新暦との混用であり、1928年と1929年は、主に干支（即ち旧暦）と新暦との混用である。1930年には殆ど太陽暦（即ち新暦）が使われていた。例えば、1930年 3 月 2 日・9 日、同年 4 月 3 日、5 月 8 日・9 日・20 日、6 月 28 日はみな太陽暦である。しかし、鹿港地方の茂順商行の杭菊（重量単位210包・純重量

89.25斤) 入荷と、台北地方の万成昌薬行の九節菖蒲(重量単位1件・純重量43斤)、韭白淨(重量単位1件・純重量36斤)、皮硝(重量単位1件・純重量85斤)の入荷についての書簡日付、即ち同年5月16日は、結局旧暦か新暦か入手資料の欠乏でいまだに解明できない。

#### B 輸出漢方薬の品種の問題について

1927年旧暦4月8日から1930年新暦6月28日までの現存の商務書簡中の関係データの統計によれば、上海寿康薬行は長崎泰益号の仲介で漢方薬三角形販路を通じて台湾の関係商社と160回以上の取引を行っていた。その輸出漢方薬には菊花、杭菊、滁菊、黄菊、黄菊雙芽、木耳、白木耳、甘松、羌活、羌王、独活、毛茛、人参、紅参、参鬚、紅参鬚、高麗参、石柱参、天字別直参、沙参、党参、当帰、川帰、西帰、水蓮、白蓮子、紅蓮子、蓮鬚、大棗、紅棗、棗杞、貝母、扣貝、川貝、盧貝、黄耆、晉耆、杏仁、吋芎、冬花、黄蓮、二萬斷(續斷)、肚黄、白木、柿霜餅、大雲(肉苁蓉)、三稜、韭白淨、九節菖蒲、馬勃、冬虫草、燕窩、全虫、池黄、皮硝、紫金錠など50余種があり、植物性・動物性・鉱物性の三大領域に跨っていた。寿康薬行の輸出漢方薬の種類は協成元記薬行と乾泰薬行に次いで三番目にランクされた。

上海寿康薬行から出荷された漢方薬の品種は多かっただけではなく、その一般の治療薬の出荷量と貴重な滋養薬の出荷量も共に多かった。これは該薬行の台湾関係商社との取引の一大特色である。

以下、簡略に上海寿康薬行から輸出された一般の治療薬と貴重な滋養薬についての統計と分析をこころみたい。

#### (2) 上海寿康薬行から輸出された一般の治療薬についての統計と分析

漢方薬は主に治療薬と滋養薬との二種類に大別される。治療薬とは勿論、病気を治療するものであり、一般の治療薬と比べてもあまり高くなく、重病・大病ではない病気の治療に使う薬を指すものである。

表1によれば、上海寿康薬行から輸出された一般の治療薬には羌活・独活・

貝母・杏仁などがある。

#### A 羌活、独活の輸出について

羌活は羌独活ともいい、セリ科に属するシシウドの根であり、鎮痛・鎮痙・新陳代謝活性化薬として、頭痛、関節痛、リウマチ、身体不随、身体疼痛などに応用する一般の治療薬である。

明代の李時珍は『本草綱目』で次のように述べている。「羌中（今の山西省西部～陝西省・甘粛省）から来るものを良品とする。故に羌活、胡王使者などの諸名があるのだ。後世これを全然二種別個のものとするのは誤りだ」<sup>(3)</sup>と。しかし、現在市販される中国産の羌活と独活は全く別種の植物である。上海寿康薬行が長崎泰益号の仲介で漢方薬三角形販路を通じて台湾の関係商社に輸出した羌活、独活は、同一の品種ではないが、類似の作用が多少ある二つの薬種である。

表2 泰益号の仲介による寿康薬行から輸出された羌活、独活の統計<sup>(4)</sup>

出荷期日	薬種の名	単位	総重量	純重量	入荷の商社	地域
1927. 7. 5	羌 活	1 連			徳 興 商 行	台南
1928. 2. 20	〃	1 件	310斤	230斤	東 昌 薬 行	〃
〃	〃	2 件	556斤	410斤	林協興商行	台北
1928. 4. 15	〃	5 件	1400斤	1020斤	謝協源薬行	員林
1928. 4. 20	〃	1 件	315斤	233.75斤	捷 茂 薬 行	台北
1928. 6. 24	〃	2 件			林協興商行	〃
1928. 7. ?	〃	1 件			茂 順 商 行	鹿港
1928. 9. 1	〃	1 件	309斤	232斤	万成昌薬行	台北
1929. 7. 23	独 活	合計			謝協源薬行	員林
	羌 王	5 件				
1929.11.23	羌 活	1 連			建 昌 商 行	台南
1930. ? . 30	〃	1 蓮			〃	〃
1930. 5. 20	〃	1 件		240斤	中 興 薬 行	台中

表2 は長崎泰益号宛て上海寿康薬行の1927年7月5日、1928年2月20日、同年4月15日・20日・6月24日・9月1日、1929年7月23日、同年11月23日、1930年5月20日など現存の商務書簡中の関係データに基づいて作成した

ものである。この間、上海寿康薬行から輸出された羌活と独活とは延べ22重量単位（19件、3連）ある。1重量単位の純重量は200斤から400斤までである。もし300斤の平均標準で推算すれば、この間の取引総額は6600斤となる。これは長崎泰益号の仲介によって、上海寿康薬行が台湾関係商社に輸出した羌活と独活の取引数量の大きさを物語る。

#### B 貝母、杏仁の輸出について

貝母と杏仁は羌活と独活に次いで、長崎泰益号の仲介により上海寿康薬行から台湾関係商社へ輸出された漢方薬の重要品目である。

表3 泰益号の仲介による寿康薬行から輸出された貝母、杏仁の統計<sup>(5)</sup>

出荷期日	薬種の名	単位	総重量	純重量	入荷の商社	地域
1928. 2. 20	蘆 貝	1 件		105斤	捷 茂 薬 行	台北
〃	杏 仁	1 件	203斤	167斤	台湾薬材公司	〃
	川 貝	1 件	240斤	154斤		
1928. 2. 22	〃	1 件	336斤	223斤		
1928. 2. 23	杏 仁	1 件	224.4斤		林協興商行	〃
1928. 2. 26	〃	1 件	270斤	224.4斤	捷 茂 薬 行	〃
1928. 4. 22	川 貝	1 箱	120斤	83.3斤	栄 徳 商 行	彰化
1928. 6. 24	扣 貝	1 件			林協興商行	台北
1929. 10. 13	杏 仁	1 包	207斤	2 包合計	捷 茂 薬 行	〃
	〃	1 包	215斤	355.3斤		

貝母は主にユリ科に属するアミガサユリという観賞用と薬用とを重ねた植物の鱗茎であるが、その地下の鱗茎はコヤス貝に似ているので貝母の名が生まれた。

貝母の原産地は中国であり、産地により貝母の名称も異なる。例えば、寧夏・甘肅などの中国の西部産出のものは西貝母と名付けられ、四川省産のものは川貝母と名付けられ、浙江省産のものは浙貝母と名付けられる。しかし、同じ川貝母と浙貝母とはその具体的産地と加工方法によりまた幾つかの種類に分けられる。

貝母は鎮咳、去痰として有効であり、排膿の作用もあり、有名なかぜ薬と

して知られる。その中、浙貝母が清熱作用に優れているのに対して、川貝母は潤す作用に優れる。寿康薬行の輸出した貝母は主に川貝母である。泰益号宛て寿康薬行の1928年2月20日、同年4月22日、6月24日の書簡によれば、この間、該薬行は彰化地方の栄徳商行、台北の林協興商行・捷茂薬行・台湾薬材会社に1箱、5件の川貝、扣貝、盧貝を輸出した。川貝は川貝母の略称であり、扣貝と盧貝とは川貝母の中のそれぞれの特色を持つ二つの品種である。1928年4月22日、栄徳商行に輸出された1箱の川貝の総重量は120斤(純重量は83.3斤)しかないが、同年2月22日、台湾薬材会社に輸出された1件だけの川貝の総重量は336斤(純重量は223斤)に達した。もし、平均して1重量単位の重量150斤の標準で推算すれば、寿康薬行が上記三日間に台湾の関係商社に輸出した貝母の重量は合わせて900斤以上に上ったと推定される。

杏仁はバラ科の十分に熟したアンズ、及びホンアンズの種子であり、更にその核を割って取り出した中の子仁である。中国では苦味のあるものを杏仁と呼び薬用とし、苦味がなく甘味のあるものを甜杏仁(甘杏仁)と呼び食用とする。

杏仁は痰を切り、呼吸中枢に対する鎮静の作用及び駆虫、殺菌などの作用があり、廉価な治療薬の一品種である。泰益号の仲介により寿康薬行が台湾の関係商社に輸出した杏仁は甜杏仁(甘杏仁)などの食用のものは含まれず、全部苦杏仁即ち薬用の杏仁である。泰益号宛て寿康薬行の1928年2月20日・26日、1929年10月13日の書簡によれば、寿康薬行が台湾の関係商社に輸出した杏仁の重量単位は2包、3件である。1928年2月20日、台北の台湾薬材会社に輸出した1件の杏仁の総重量は203斤であり、同年2月23日と26日、台北の林協興商行と捷茂薬行に輸出した各1件の杏仁の総重量はそれぞれ224.4斤と270斤である。もし、1重量単位200斤の標準で推算すれば、表3の四日間に、寿康薬行が泰益号の仲介により台北の捷茂薬行・林協興商行及び台湾薬材会社に輸出した5重量単位の杏仁は1000斤にも上ったと推定される。これは杏仁の輸出量の大きさを物語っている。

## C 他の治療薬の輸出について

上海寿康薬行が長崎泰益号の仲介により台湾の関係商社に輸出した一般の治療薬は、前述の羌活・独活・貝母・杏仁を除けば、ほかに甘松、芍药、冬花、黄連、二萬断（續断）、肚黄、白朮、柿霜餅、三稜、韭白淨、九節菖蒲、馬勃、全虫、池黄、皮硝などがある。

表4 泰益号の仲介による寿康薬行から輸出された他の治療薬の統計<sup>(6)</sup>

出荷期日	薬種の名	単位	総重量	純重量	入荷の商社	地域
1927.10.22	冬 花	1 件	130斤	89.25斤	林協興商行	台北
1927.11. 1	黄 連	1 包			万成昌薬行	〃
1927.11. 2	〃	5 件			乾 元 薬 行	〃
1927.11. 5	冬 花	1 件	93斤	60.35斤	〃	〃
	二 万 断	1 件	300斤	238斤		
	肚 黄	1 件		204斤		
	全 虫	1 件	61斤	44.2斤		
1928. 2.19	白 朮	1 包		12斤	東 昌 薬 行	台南
	柿 霜 餅	1 件	128斤	90斤		
1928. 2.20	黄 連	2 包	(郵送の包)	9 斤	捷 茂 薬 行	台北
〃	馬 勃	1 件	137斤	65斤	台湾薬材公司	〃
1928. 2.23	三 稜	1 件	277斤	226.9斤	謝協源薬行	員林
1928. 4.15	甘 松	1 件	348斤	278.8斤	謝協源薬行	〃
1928.11.14	池 黄	1 件			乾 元 薬 行	台北
1930. 5.16	九節菖蒲	1 件	57斤	43斤	万成昌薬行	〃
	韭 白 淨	1 件		36斤		
	皮 硝	1 件	100斤	85斤		

紙幅の都合上、本節では他の治療薬の中の5種について簡単に分析したい。

ア、三稜は荆三稜と黒三稜をはじめ種類が多い。荆三稜はミクリ科のミクリ、エゾミクリの塊茎を通常外皮を剥いて乾燥したものであり、主産地は安徽省・遼寧省である。黒三稜はカヤツリ科のヤガラ、ウキヤガラの塊茎を乾燥したものであり、黒竜江省・吉林省などに産する。該薬物は血を活かし、瘀血を去る効能があるので、血阻・淤積の症を治す。長崎泰益号宛て上海

寿康薬行の1928年2月23日の書簡によれば、該薬行は総重量277斤(純重量226.9斤)の1件の三稜を員林地方の謝協源薬行に輸出した。漢方薬三角形販路における三稜の取引は少なく、その輸出業務は主に寿康薬行で営まれた。

イ。甘松の種類も多い。漢方薬三角形販路で取引された甘松は甘松香(カンショウコウ)であり、オミナエシ科に属する植物の根茎を乾燥したものである。該薬物は宋代の馬志等の『開宝本草』に初めて正品として収載された薬であるが、すでに唐代の蘇敬等の『本草拾遺』及び『海薬本草』にその名がみられる。明代の李時珍は『本草綱目』で「川西の松州(四川省松潘地方)に産するものであり、其の味が甘いからかく名づけたのである」<sup>(7)</sup>といている。これが甘松という名称の由来である。甘松は鎮痛、鎮静、健胃薬として、心腹の満痛、胃痛、嘔吐、食欲不振、下痢症状などに応用する一般の治療薬である。漢方薬三角形販路での長崎泰益号の仲介による上海寿康薬行の甘松の輸出回数はあまり多くないが、毎回の輸出量は割合に大きかった。例えば、該薬行が1928年4月15日に員林地方の謝協源薬行に輸出した1件の甘松の総重量と純重量とはそれぞれ348斤と278.8斤に上った。

ウ。韭白淨はその略称が韭白であり、ウリ科に属する特殊なラッキョウの鱗茎であり、鎮痛、鎮咳、祛痰の作用があり、現在、一般に狭心症や心臓性ぜんそくなどの主に心臓疾患に対して用いられるが、『本草拾遺』、『食医心鏡』をはじめ多くの漢方関係の古書では、健胃、整腸を目的に用いられている。百年近く前の漢方薬三角形販路における韭白の取引は特に少なく、上海の出荷商社でこの取引を営んだのは寿康薬行だけである。1930年5月16日、該薬行は台北の万成昌薬行に1件(純重量36斤)の韭白を輸出した。

エ。柿霜餅は柿餅と関連しているが、字義そのものではない。柿餅は特殊な方法で作られた干しカキであり、柿霜は干しカキの表面にふく霜のような

白い粉である。この粉を取って集め、水で調整してから鑄型で乾燥させたのが柿霜餅である。柿餅は干し果物であるが、それとは違い柿霜餅は祛寒剤としての漢方薬である。漢方薬三角形販路での柿霜餅の取引は滅多に見られない<sup>(8)</sup>。該取引に従事した上海の出荷商社はただ寿康薬行の一軒のみである。1928年2月19日、寿康薬行は台南の東昌薬行に純重量90斤の1件の柿霜餅を輸出した。

オ。菖蒲はキンボウゲ科の *Anemone altaica* Fisch の根茎を乾燥したものである。古代本草に言う九節菖蒲は、菖蒲で一尺の間に9個の節があるものを指している。これは後漢の陶弘景の『名医別録』に記載されたところによったもので、「菖蒲は上洛の池沢および蜀郡の嚴道に生じ一尺九節あるものを良品とする」とある。宋代の田大明の『日華子本草』では、「菖蒲は、節潤に生じたものは堅くて小さく、一尺九節であるものを上とする」<sup>(9)</sup> といっており、これは石菖蒲を指している。しかし、四川省では稀にサトイモ科の石菖蒲 *Acorus gramineus* Soland の根茎を九節菖蒲と称するところもある。九節菖蒲は鎮静、散湿、祛痰などの作用があり、神経衰弱、消化不良、リウマチなどの症状に用いられ、また解毒、殺虫作用があるとして外用される。漢方薬三角形販路での九節菖蒲の取引は至って少ない。該薬材の輸出を営んだ上海の出荷商社は寿康薬行しかない。しかも、寿康薬行の出荷量も少ない。例えば、泰益号宛て寿康薬行の1930年5月16日の商務書簡によれば、該薬行が台北の万成昌薬行に輸出した1件の九節菖蒲の総重量は43斤にすぎない。その原因は次のように解釈される。当時、台湾に産出して代用された他の品種の菖蒲の値段が大陸から輸出されるものより安かったために、特別の需要がある以外は、わざわざ漢方薬三角形販路を通じて入荷されることはなかったものと考えられる。

カ。馬勃は学名により三種に大別される。その一は脱皮馬勃 (*Lasiosphaer fenzlii* Reich) であり、その二は大額馬勃 (*Caluatia gigantea* Lloyd) であり、その三は紫額馬勃 (*Caluatia liacina* Lloyd) である。別名には

馬朮(出典:『名医別録』)、馬屁勃(出典:陶弘景の言葉)、馬朮菌(出典:『蜀本草』)、牛屎菇(出典:『本草綱目』)などがある<sup>(10)</sup>。森武宗は1963年2月、『薬用植物図鑑—採集栽培及効用』で次のように述べている。馬朮は「各地の山林中に秋季多く発生する一種の菌類で略ぼ球形をなし大きなものは直径一尺にも及ぶものがある、白色の外皮に包まれ内皮は黄色にて薄く外皮との間に褐色の層がある、質は柔らかにて純白であるが段々褐色となり弾力性を生じ古綿の様になり胞子を包む。菌体を採集乾燥し馬朮と云ふ。馬朮は古来より有名は止血薬で諸外傷に応用し、其の他吐血、咯血、衄血等に煎服する」<sup>(11)</sup>。九節菖蒲の取引状況と同様、漢方薬三角形販路での馬朮の取引回数と成約高はとても少ない。該薬材の輸出を営んだ上海の出荷商社は寿康薬行の1軒だけである。その出荷量も少ない。例えば、泰益号宛て寿康薬行の1928年2月20日の商務書簡によれば、該薬行が台北の台湾薬材会社に輸出した1件の馬朮の総重量は137斤であるが、その純重量は65斤しかなかった。

キ、黄連は『神農本草経』の上品に収載され、古来から消炎、止血、瀉下などの要薬として繁用されてきた。李時珍は『本草綱目』で次のように述べている。「その根が珠を連ねたようで、色が黄だから名付けられたのである」、と。中国産の黄連は主産地である四川省・雲南省に因んで川連と雲連に分けられ、川連(川黄連、正川連)はさらに味連、雅連、鳳尾連などに分けられる。それらの学名は *Coptis chinensis* Franch, *C. deltoidea* C.Y. Cheng などである。黄連の産地に多少の異動はあるが、一般には四川産のものを良品としていた<sup>(12)</sup>。百年近く前、長崎泰益号の仲介により上海寿康薬行から台湾に輸出された黄連は主に良質の四川産の川黄連、正川連などである。九節菖蒲、馬朮などの取引状況と異なり、黄連の輸出は寿康薬行の漢方薬三角形販路取引上の一大項目であり、輸出回数と成約高は共に大きかった。長崎泰益号宛て上海寿康薬行の1927年11月2日の商務書簡に記入されるデータだけによれば、当日とその前日、寿康薬行が台北の乾元薬

行と万成昌薬行に輸出した黄連はそれぞれ5件と1包である。漢方薬三角形販路において船便で発送された黄連の重量単位の一としての件の重量は大体100斤から200斤までにあたる。もし、150斤の平均の標準で推算すれば、この二日間、寿康薬行が乾元薬行と万成昌薬行に輸出したら5件・1包の黄連の総重量は750斤以上に上った。包は漢方薬三角形販路で郵送された漢方薬の最小の重量単位である。1928年2月20日、寿康薬行が台北の捷茂薬行に輸送した2包の黄連の純重量も9斤に達した。以上は漢方薬三角形販路における上海寿康薬行の黄連輸出货量の多さを裏付ける。

なお、統計表4「泰益号の仲介による寿康薬行から輸出された他の治療薬の統計」に記入される「二万断」とは如何なる薬物であろうか。古代の主要な本草書と現代の漢方薬辞典にはこの薬名が見当らない。これは長崎泰益号の帳簿及び泰益号宛て上海寿康薬行の商務書簡を解読する際の一つの謎となった。しかし、旧上海の漢方薬店経営者やその古参店員の判断によれば、「二万断」とは即ち統断の別称の一つであるという。

統断の別称は相当に多く、しかも産地によって異なる。江蘇新醫學院編『中醫大辭典』(上海人民出版社、1977年7月、第1刷発行)は次のように述べている。「統断の別名には竜豆、統折(出典：『神農本草経』)、接骨、南草(出典：『名医別録』)、接骨草(出典：『衛生易簡方』)、川断(出典：『臨証指南』)などがある。」<sup>(13)</sup> 其中的「川断」は即ち産地によって付けられる別名であり、四川省産の統断の名称である。遺憾ながら、『中国歴史地名辞典』<sup>(14)</sup> や『辞海』<sup>(15)</sup> には「二万」という地方がない。これは「二万断」が地方名とは直接的関係のないことを推測させる。

しかし、統断は筋骨の折傷を治す薬効から名付けられたものであるが、古くから同様の薬効をもつものが多く統断と称され、異物同名品が多い。該薬物は今、みな茎、葉を用いている。陶弘景が「節毎に断たれ、皮に黄皺があり、鶏の脚のようなもの」を統断の良品としたことはある<sup>(16)</sup>。こういうわけで、「二万断」はある地方に産出し、節が多く、節毎にみな断裂がある良質の統断の名称

ではないかと推測される。

二万段は、上海寿康薬行と台湾関係商社との重要な取引の一つである。例えば、長崎泰益号宛て寿康薬行の1927年11月5日の書簡によれば、寿康薬行が台北の乾元薬行に輸出した該薬物の総重量は300斤に、純重量は238斤に上った。

翁其銀『上海中薬材東洋荘研究』は次のように述べる。「治療薬とは病気を治める薬である。漢方では解表薬、温裏薬、清熱薬、化痰止咳平喘薬、芳香化湿薬、瀉下薬、逐水滲湿薬、行気薬、平肝息風薬、安神薬、去風湿薬、收渋薬などはみな治療薬である。漢方薬三角形販路で取引された200種ほどの薬材の五分の二は治療薬に属する。」<sup>(17)</sup> 上海寿康薬行の輸出治療薬の多くは植物性・動物性・鉱物性の三大領域に跨っていた。その中には甘松、羌活、羌王、独活、貝母、扣貝、川貝、盧貝、黄耆、晉耆、杏仁(苦杏仁)、吋芎、冬花、黄連、二萬斷(續斷)、肚黄、白朮、柿霜餅、三稜、韭白淨、九節菖蒲、馬勃、池黄、皮硝、紫金錠などがある。しかも、治療薬の輸出量は漢方薬総輸出量の60%近くの比率を占めている。

前述の通り、長崎泰益号の仲介による裕孚系の企業グループの本店・裕孚洋行の台湾関係商社への輸出漢方薬は麻菰、白麻菰、雪白麻菰、雪白上麻菰、木耳、白木耳、川耳、仙耳、禿参、金山大禿参、高麗参、杏仁、紅棗、烏棗(黒棗)、蓮子、白蓮(白蓮子)、春白蓮、蘇白蓮子、香蓮、白根子、川貝、檀香、核桃、槐米、槐花、金針菜、杜黄実、白肚黄、黄実などがある<sup>(18)</sup>。その中の麻菰、白麻菰、雪白麻菰、雪白上麻菰はマコモ或いはキノコに属し、木耳、白木耳、川耳、仙耳はキクラゲに属し、蓮子、白蓮(白蓮子)、春白蓮、蘇白蓮子、香蓮はハスの実に属した。これらは核桃、槐米、金針菜などと同様にみな食事療法に供するものであり、病気の治療に供する専用の治療薬は川貝など数品しかない。反対に、裕孚系の企業グループの一メンバーとしての寿康薬行の輸出品の半分以上はみな治療薬である。これは有名な漢方薬専門店である寿康薬行の性格と特徴をよく反映しているだけでなく、裕孚系の企業グループにおけるその重要な地位を物語る。

紙幅の関係上、今回はただ上海寿康薬行から輸出された一般の治療薬についての簡単な統計と分析に終った。その貴重な滋養薬の輸出についての統計と分析の概略は次回に俟つ。

## 註

- (1) 長崎泰益号宛て上海寿康薬行の1927年4月8日から1930年6月28日までの商務書簡中の関係データ、参照。
- (2) 翁其銀『上海中薬材東洋荘研究』上海社会科学院出版社、2001年2月、第1版発行、第7～8頁。
- (3) 明・李時珍『本草綱目』（下冊）人民衛生出版社、1982年11月、第1冊第1刷発行、第1902～1903頁、参照。
- (4) 長崎泰益号宛て上海寿康薬行の1927年7月5日から1930年5月20日までの商務書簡中の関係データ、参照。
- (5) 長崎泰益号宛て上海寿康薬行の1928年2月20日・22日・26日、6月24日、1929年10月13日の商務書簡中の関係データ、参照。
- (6) 長崎泰益号宛て上海寿康薬行の1927年10月22日、同年11月5日、1928年2月23日、同年4月15日、11月14日、1930年5月16日などの商務書簡中の関係データ、参照。
- (7) 難波恒雄『和漢薬百科図鑑』[1] 保育者、1997年11月30日、改訂新版発行、第50頁、参照。
- (8) 同註(2)、第162頁、参照。
- (9) 同註(7)、第8頁、参照。
- (10) 江蘇新醫學院編『中醫大辭典』（上冊）上海人民出版社、1977年7月、第1刷発行、第283頁、参照。
- (11) 森武宗『薬用植物図鑑－採集栽培及効用』木村金吾発行所、1963年2月1日、初版発行、1977年5月1日、第16刷、第148～149頁、参照。
- (12) 同註(7)、第154～156頁。
- (13) 江蘇新醫學院編『中醫大辭典』（下冊）上海人民出版社、1977年7月、第1刷発行、第2267頁、参照。
- (14) 復旦大学歴史地理研究所編『中国歴史地名辞典』江西教育出版社、1988年8月、第1刷発行、第1頁。
- (15) 辞海編集委員会編『辞海』上海辞書出版社、1980年8月、第1刷発行、第5～

9 頁。

(16) 同註(7)、第185頁。

(17) 同註(2)。

(18) 同註(2)、第157頁。